

In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University merge to Osaka Metropolitan University

Title	(第3章)シンポジウム「文化プロジェクトと都市計画」基調講演(2): フランス・ナント市のアートプロジェクトについての日本からの視座
Author	川崎 修良
Citation	URP「先端的都市研究」シリーズ. 24 巻, p.17-25.
Published	2021-03-15
ISBN	978-4-904010-39-6
Type	Book Part
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学都市研究プラザ
Description	創造都市における文化プロジェクトと担い手育成: フランス・ナント市と京都市を例に
DOI	10.24544/ocu.20210427-004

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

第3章

シンポジウム「文化プロジェクトと都市計画」

基調講演②：フランス・ナント市のアートプロジェクトにつ

いての日本からの視座

川崎修良

1 はじめに

長崎県立大学の川崎と申します。私からは日本から見たフランス・ナント市のアートプロジェクトと都市計画という視点で、Gangloff さんの話を補完させていただきたいと思います。今回、このようなシンポジウムで京都とナントの事例を対話させたいと思った背景として、両都市ともに文化プログラムによる政策横断的な都市再生が起っています。そこで、両都市でプロジェクトが進められていくプロセスとして異なる点を提示することで、改めて今後の都市像をどう描くか考えることを意図しました。

2 ナントの都市再生の特徴

まず、ナントという都市にはその中で活動するアクターである芸術家とそれを楽しむ市民が住まい、その舞台装置として都市が生成しているという視点が興味深いです。セノグラフィは直訳すると舞台美術ということですが、そこには動的なものを主役に捉えて、主役を引き立てるための装置を配していく考えがあると思います。先に講演いただいた Gangloff さんはナントの試みを「都市のセノグラフィ (scénographie urbain)」と呼んでいます。実際にそのような視点を持って都市を見つめている様子がナントからは感じ取れます。

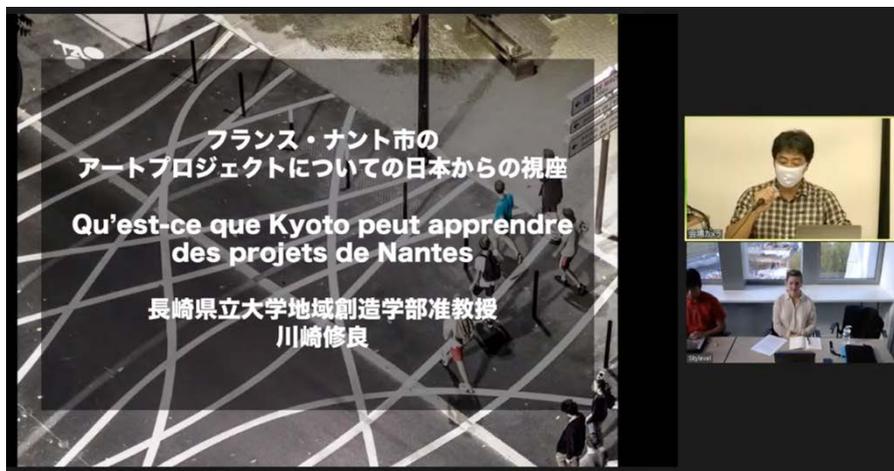


写真 3-1 オンラインシンポジウムの様子(youtube 配信画像)

Gangloff さんからは主に都市のアクターの視点からお話を頂きましたが、政治においても文化が都市を牽引する流れが作られてきたこともポイントだと考えます。1989年にナント市長となった Jean-Marc Ayrault (ジャン＝マルク・エロー) は様々な芸術的イベントをナントにもたらしめます。

Gangloff さんからもご紹介いただいた Royal de Luxe (ロワイヤル・ド・リュクス) の野外劇(写真 3-2) など実際の都市空間における文化プロジェクトがありますが、こうしたアトラクション集団が所在することが都市再生の方針にも影響を与えます。造船所のドッグの跡地は写真の巨大象をはじめとした機械群の展示場と、機械を制作するアトリエに改装されました。周辺の敷地は機械仕掛けのアトラクションを備えた都市公園となり、現在のナント島のシンボルとなっています。このような都市再生には、ナント出身の作家ジュール・ヴェルヌの小説に登場する機械(挿絵 3-3) もモチーフになっています。

他にも、公教育の分野にもその影響があります。Gangloff さんが研究員として所属するナント国立建築大学では、建築、都市、風景などが劇場や映画と共通であるという考えに基づいたセノグラフィ教育を 1999 年から導入し



(左)写真 3-2 ロワイヤル・ド・リュクスの 2005 年アミアン公演(出典:wikipedia(CC BY-SA 2.0)),(右)挿絵 3-3 Jules Verne の小説 “La Maison à vapeur”に登場する象の形をした鋼鉄製蒸気機関車の挿絵(出典:wikipedia(PD))

ています。セノグラフィの専門教育を行う公立学校はフランス国内に複数ありますが、建築学の学位資格を取得できるのはこの1校のみです。都市再生の手法と、その都市における建築学の教育が密に関係していることは、その都市の文脈での都市再生の担い手が公的に育成されているということになります。

3 京都の芸術祭ニュー・ブランシュ京都とナントの関係

さて、ナントで進められた文化政策、実際の都市空間における文化プロジェクトが一つのフェスティバルの形に結実したのが、京都では2011年から行われているニュー・ブランシュ京都であり、ナントでは2012年から行われている *Le Voyage à Nantes* (ル・ヴォワイヤージュ・ア・ナント:「ナントへの旅」の意、以下LVANと記載)とすることができるでしょう。

ニュー・ブランシュ京都はパリで2002年から実施されている芸術祭 *nuit blanche* (ニュー・ブランシュ:「白夜」の意)の考え方を輸入したプロジェ

クトです。nuit blanche の初代芸術監督はナントで 30 年にわたって様々な文化プロジェクトの芸術監督を務めてきた Jean Blaise (ジャン・ブレーズ) でした。

ブレーズは 1990 年から 1995 年にかけてナントで実施された深夜の芸術祭 les Allumées (レ・ザルメ:「点灯」の意) にて、アートの場所とは考えられていなかった荒れた産業遺構を活用したプログラムを成功させました。その後、2001 年にパリ市長となったドラノエ政権によってブレーズが招待され、パリにおける夜の芸術祭 nuit blanche が実施されました。

ナントにおいては、2007 年から 2012 年にかけてナントと港町サン=ナゼール (Saint-Nazaire) を結ぶロワール川沿いにアートを配する Estuaire (エスチュエール:「河口」の意) のプログラム、2012 年からはナント市街の様々な場所にアートを配する芸術祭 LVAN が行われます。これらのプログラムの芸術監督もブレーズです。LVAN とニューイ・ブランシュ京都は親戚関係にあるプログラムと言っても良いかもしれません。

4 都市の中に文化プログラムを挿入する手法の政策横断性

LVAN はその展示の中で都市開発された場所に人々を誘う機能があります。写真は、2012 年及び 2019 年の芸術祭の展示企画の場所を巡る一つの推奨コースとして事務局が設定した経路を地図に落としました (図 3-4)。年度を経て経路が拡張していることが見て取れます。この経路は実際に街の路上に緑色の線 (写真 3-5) として描かれ、その線は今では芸術祭のシンボルのようになっています。まず、このような線が道路に残せることが日本からすると面白い。芸術監督のブレーズは「緑の線は元々関係ない場所をつないで全体として統一を図った、観客のための便宜的なもの」と述べています。

しかし、回を重ねるにつれて緑の線にも行政セクターを横断するような機能が生まれています。2012 年と 2019 年の線の広がりを見ると、芸術祭の作品の誘うエリアが、ナント市の都市開発に目を向けさせるように誘導す

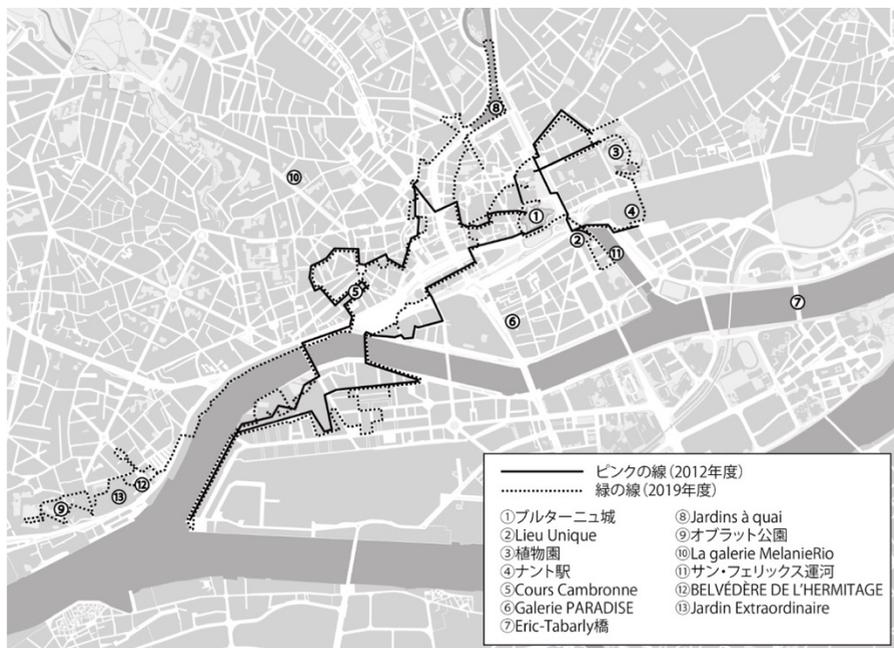


図 3-4 le voyage à nantes パンフレットに示された推奨ルートの変化(筆者作成)

る機能を持っていることが見えてきます。

拡大したエリアの特徴を見ていきます。まず地図右上のナント駅ですが、ナント駅とその周辺の開発プロジェクトが進められています。最終的には南北をつなぐ機能を駅に持たせる計画ですが、2019年までに周辺地域の整備が完了しています。地図左下のサン＝フェリックス運河（Canal St.Felix）では、2018年に再開発計画が発表され、同年の芸術祭では川と道路の境界をつなぐ視点のアートが配されました。

地図上部のエルドル川（L'Erdre）に芸術祭のルートが拡張した背景には、ナント市緑地環境局（Service des Espaces Verts et de l'Environnement）のプロジェクトが関係しています。2013年にナント市が欧州緑の首都（European green capital）に採択されたことを機に、かつての船溜りを浮島により緑化するプロジェクトとこれを眺める船を模したレストランが整備され、以降

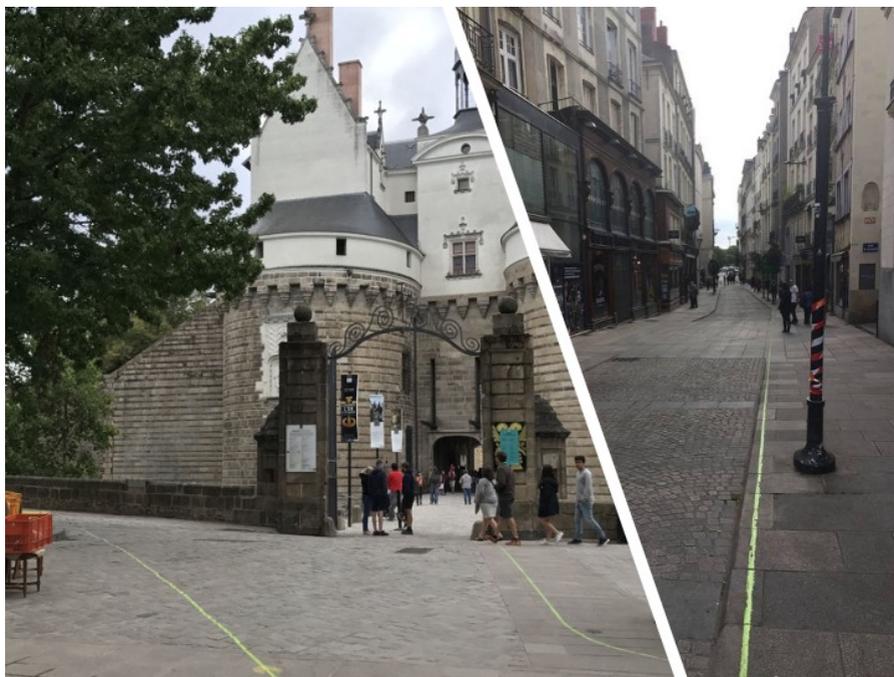


写真 3-5 路上に引かれた緑の線が芸術祭の展示作品へと誘導する(筆者撮影)

船溜りでの緑化プログラムがイベントとして毎年行われています。

地図右下の採石場跡地では新たな緑地公園と街区の開発が進められています。「7つの展望台のある散歩道」のコンセプトで開発が進められる中、芸術祭の作品としても展望台が設置されました。ナント広域都市圏開発局による街区再開発、ナント市緑地環境局による庭園開発、芸術祭事務局による恒久的なアート設置などが並行して行われています。

都市の中に文化プログラムを挿入する手法は、芸術祭だけではなく、ナントの都市再開発のセクターでも取り入れられています。写真 3-6 は LVAN 開始の翌年 2013 年に、ナント島の再開発を手がける地方公共会社 SAMOA によって実施された、“parcours green island (緑の島の経路)” のパンフレットです。ナント島の再開発の新しい方法を検討するために実施された、デザイ



www.parcoursgreenisland.com

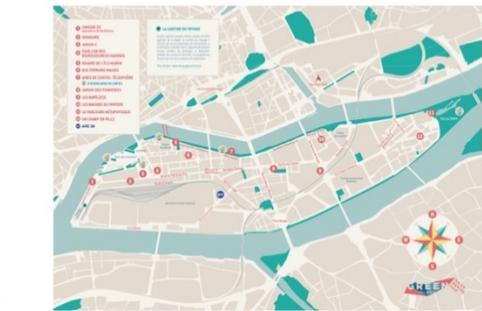
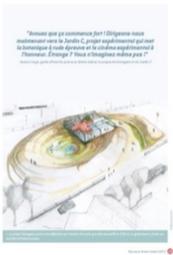


写真 3-6 parcours green island パンフレット(一部抜粋)

ナー、建築家、造園家、芸術家、学生等が参加した公共スペースでの 12 の実験プロジェクトです。開発予定地に様々な文化プロジェクトを配置して人々を誘う企画には、これまでの文化セクターの取り組みの影響が見て取れます。

このように、文化政策を通して洗練されてきた人々を場所に誘導する手法が、緑地環境を担う部局や、都市再開発を担う部局など、様々な行政セクターの取り組みと関係性を持って機能しています。

5 都市計画の技法としての文化プログラム

LVAN は挑戦的な一例であると思いますが、都市開発の過渡期に文化プロ

グラムを挿入することで、その後の開発の方針に影響をもたらすような取り組みが、2010年ごろからフランスで注目されています。これは過渡期の都市計画、フランス語で“urbanism transitoire（ユルバニズム・トランジトワール）”と呼ばれています。2018年には公的機関であるパリ地域研究所（l’Institut Paris Region）が実践書を作成するなど、この技法は一般的に受け入れられつつあります。

他に一時的な都市計画、刹那的な都市計画などの呼び方もありますが、ニュアンス的には文化プログラムの終了後の影響をどの程度意識しているかによって使い分けられているようです。社会学者の Benjamin Pradel によると²、過渡期の都市計画（urbanisme transitoire）は建物の解体後、再開発が始まる前の空き地、古い道路や社会住宅、公共の場所などを暫定的に居住者が利用できるようにする取り組みで、プロジェクトを通して明らかになったニーズを統合し、最終的な都市プロジェクトに実際の影響を与えることが意図されています。一時的な都市計画（urbanisme temporaire）は地域づくりの戦略に関連させ、長期的な空間変換を視野に入れた短期的な実践で、将来の再開発への影響は意図されていません。刹那的な都市計画（urbanisme éphémère）はイベントによるお祭りのような空間占有により、建物と公共空間、私用空間の使用のロジックを変換させる試みとしています。éphémère は日本語の「切ない」というような情緒的なニュアンスを持つ言葉です。

6 おわりに

以上、ナントの取り組みを見ていくと、まずエロー市長の強力なイニシアティブがあり、政治的な都市政策のビジョンがあってそのための手法として文化セクターによる文化プログラムが展開されました。とりわけ文化プ

² リヨン大学のプログラム“École urbaine de lyon”に掲載されたテキスト“L’urbanisme temporaire, transitoire, éphémère, des définitions pour y voir plus clair.”（2019年12月12日）を参照した（<https://medium.com/anthropocene2050/lurbanisme-temporaire-transitoire-%C3%A9ph%C3%A9m%C3%A8re-des-d%C3%A9finitions-pour-y-voir-plus-clair-4a94f7916dfb>）。

プログラムが牽引する形で都市のビジョンが共有され、各々の行政セクターともつながる横断的な都市開発が動き始めているのではないかというのが私の仮説です。

さて、翻って京都を見ると、市民セクターの自発的な活動であるまちづくりにおいて、都市空間のイメージを変えるような意図をもって取り組みを行なってきた事例があります。本日のシンポジウムの第二部では、実践者の視点で3つの市民主導の文化プロジェクトを紹介していただきます³。

一つ目は「三条あかり景色」です。三条あかり景色は京都の三条通で2004年から2006年にかけて、同エリアの夜の賑わいに乏しいという市民の課題意識から実施された街区のライトアップイベントです。当時はまだ一般的ではなかったプロジェクションマッピングが試みられています。

二つ目は「白川あかり茶の湯」です。琵琶湖疏水から分水する白川は、かつての流路に運河が挟まった人工的な河川で、水量が安定していることから水利を活用した産業も生まれ、2015年には「京都岡崎の重要文化的景観」のエリアの一部に指定されました。白川あかり茶の湯は、白川の親水性の高さを再評価しようとする地域住民や学生の試みからはじまり、川の中に設けられた茶席で来訪者をもてなす京都らしい取り組みに展開しています。

三つ目は「崇仁新町」です。市民主導のプロジェクトである前二つに対し、崇仁新町は民間企業が行政に提案して実現させたプロジェクトです。京都市立芸術大学の移転予定地である京都市保有の遊休地に2018年の2月から2年半の時限的な屋台村が設置されたもので、プログラムの運営や企画に芸大生が参加しています。フランスで試みられている過渡期の都市計画の考え方に非常に近い実践事例であると思います。

以上、第一部でのナントの事例の紹介と、第二部での京都の三つのプロジェクトの紹介を踏まえ、第三部の都市計画と文化プロジェクトの関係についてのディスカッションにつなげたいと思います。

³ 本冊子においてはシンポジウム第二部の講演内容の掲載に代えて、三つのプロジェクトの学生包摂のプロセスを取りまとめた論考を第5章「芸術文化の創造性を取り入れたまちづくり活動における学生包摂とその意義：京都における市民プロジェクトを題材に」として掲載する。